

ある。表層には厚さ15～20mに達する関東ロームが覆い、東京西郊の武蔵野のローム層に対比されている。海老名市域では海拔30～60mの間でなだらかな丘陵や平坦地が形成され、主に畑地として土地利用がされている。

相模平野は約1万年前に始まる完新世に、相模川の堆積作用によって形成された沖積低地である。海拔12～25mの間に平坦な地勢を呈し、湿潤な立地を反映して多くの水田がつくられている。

沖積低地と洪積台地の境界には相模川と平行して南北にのびた段丘斜面が連っている。段丘斜面は10～20mの高度差があり、比較的急斜面からなっている。母材のローム土は軟かく、小さな侵食や崩壊をきたしている箇所も少なくない。

## Ⅱ 植 生 概 観 Übersicht der Vegetation

海老名市は高度差が100mに満たず、しかも相模川、沖積平野、洪積台地という平坦な地形が多いため、開発には最適な状態にある。古くから農耕地が開け、最近では宅地化が頻繁に行われている。このような状況下で常緑広葉樹林などの自然植生が残されるのは、きわめて限られている。社寺林や屋敷林として、あるいは開発の困難な段丘斜面に小面積でみられるにすぎない。現在、残されている常緑の樹林や樹木は市の保護保全指定を受けているものが多い。沖積低地上では河原口宗珪寺のタブ林、中野の八幡のタブ林、本郷のタブ林、段丘斜面から洪積台地上では、上今泉の段丘斜面のタブ林、産川台のシラカン林、上今泉のシラカン林などがみられる。

同じ森林植生でも管理が行われているクヌギ、コナラの雑木林、スギ、ヒノキの植林は洪積台地上と段丘斜面に発達がみられる。クヌギ、コナラ林は上今泉、滝ノ本、清水寺公園、宮台などに比較的残されているが、新興住宅の造成により年々姿を消している。スギ、ヒノキ植林は滝ノ本、大久保、星谷、下谷津などに点々とみられる。

沖積低地は広くイネが水田に栽培されており、二次的にコナギ、キカングサ、アギナン、ウキクサ、アオウキクサなどの雑草が生育している。放棄されてまもない水田には、タマガヤツリ、カワラスガナ、チョウジタデなどの1年生植物が生育するが、2～3年たつとヨシ、ガマなどの多年生の高茎草原に変化するのがみられる。沖積低地上の集落では、相模川沿いの自然堤防沿いに、下今泉、河原口、今里、中野、門沢橋などがみられ、古い家屋には、タブノキ、ケヤキからなる屋敷林がみられる。

洪積台地上には広く耕作畑が広がり、栽培植物にまじって、スベリヒユ、コニンキソウ、カラスピシヤク、ホトケノザ、オオイヌノフグリ、メヒシバなどの雑草が生育している。放棄された畑地ではカナムグラ、ヒメムカンヨモギ、ススキなどが雑草群落を形成している。台地上にはまた、クリやウメなど果樹園、苗圃、北部の上今泉では桑畑などもみられる。段丘斜面は森林の残



Fig. 3 段丘斜面にはイロハモミジ-ケヤキ群集, イノデ-タブノキ群集およびスギ植林がみられる (上今泉)。

Am Kliff der Terrasse sieht man *Aceri-Zelkovetum*, *Polysticho-Perseetum thunbergii* und *Cryptomeria japonica*-Forsten (Kamiimaizumi).

されているところが多く、コナラ、ミズキ、イヌシデなどの夏緑広葉樹二次林、タブノキとケヤキの混生する発達した自然林、スギ、ヒノキの植林などがモザイク状に配分されている。

相模川の河川敷は礫や泥土からなり、堆積物と流水の影響に応じてさまざまな植生が発達している。面積的には草原がもっとも広く、オギやヨシ草原、帰化植物で冬緑性のネズミムギ草原、流水辺では春季にタガラシが帯状に生育している。低木林にはオノエヤナギ、タチヤナギ、カワヤナギなどの混生したヤナギ林がみられ、主に下流域の戸沢橋周辺に発達した植分が広がっている。